

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

起信論に於ける専念阿彌陀説 の研究

藤 野 勇

今日淨土教に於いて念仏と言えば、直ちに称名を意味するものとして誰れしも怪しまないほど一般的な常識となつてゐるが、それでは起信論に於ける念仏と言えはどうか、先ず起信論を区分して見ると、因縁分、立義分、解積分、修行信心分、觀修利益分の五区分から成立しているが、専念阿彌陀の思想を見る上に最も重要視される訳けである。先ず、一心、二門、三大は論から言えば大乗の説明で、四信五行は起信の説明を言う訳けである。しかしこの中に最も念仏思想を引用しているのが修行信心分である。論から言えば、四信、五行の法門を明し、更に止觀、勝方便を加え法門を明し、これによつて成仏得脱を教うるこの一段の大意とする機の利鈍に、止觀を広説し、自力及ばざる機を摂せんが爲に最後に勝方便他力を以て論証するのである。即ち文に言く

「復次衆生初学是法欲求正信其心怯弱、以住於娑婆世界自畏不能常值諸仏親承供養懼謂信心難可成就意欲退者、当知如来有勝方便攝護信心、謂以專意念仏因縁隨願得生他方仏土。常見於仏永離惡道。如修多羅説、若人專念西方極樂世界阿彌陀仏所修善根廻向願求生彼世界即得往生。常見仏故終無有退。若觀彼仏真如法身常勤修習畢竟得生住正定故。」(天正大茂三二ア五八三頁)

と述べられている様に他力念仏を明かしているのである。防退の方法として易行念仏の一門を開示すると、夫れ衆生「十信位兼ては」大乘の法を学び四信五行を為し、正信の初住の不退位を得んと欲するも、此娑婆世界は退縁多くして、現時之を實地に策修すること能はざるを言せん、是に於いて如来に勝方便「本願力菩薩に念仏あり三昧十六觀行等」ありて信心を攝護し給う、されば專意念仏の因縁を以て願に随つて他方仏土「諸仏の浄土なれども引経より見れば極意は彌陀の浄土なり」に生じ、

永く三惡道を離る、故に経「浄土三部経及び瑞相経等」に若し人専ら西方極樂世界の「阿彌陀仏の本願力によりて成就し給へる勝妙の国土」阿彌陀仏を念じ、所修の善根を廻向して、彼の阿彌陀仏國「無量寿又は無量光と訳す」此の阿彌陀は「極樂世界の教主」無量寿経によれば、

「法茂菩薩たりし時、世自在王仏の所に於いて二百一十億の仏土を觀、五劫の思惟を重ねて四十八の誓願を発し永劫の修行を経て十劫の昔に正覺を成就したる光明壽命共に無量なる仏体を言う」に往生せんと願求すれば即得往生疑なし、と説き給へり、是を以て往生し人は常に彼の国土に於いて仏を見奉るが故に終に退転することなし、若し更に勝機「三賢十地」のものありて彌陀の真如法身即ち理体を觀じ、常に勤修せんか正定聚「初住已上」に住するを以て、畢竟して往生することが得るなり。と勝方便によつて不退を得る道を説いたのであるが義記によると

「天台所判上三品人始從習種終至解行菩薩
中三品是十信已下。」又「下三品是今時修

々凡夫」(義記下末三十五卷)

と往生を觀するは三退あると述べてある。

往生するには、それぞれに入る位があるので他力念仏本願菩薩による念仏を現じ往生して後に位するのである。

又元曉は「見當論正爲十信初心人住此娑婆忍欲退者說防退方法」と説いている。又「准此彌陀

淨土唯有十住已去菩薩可得生」とあり後に、「

觀往生者爲防三退」と往生を觀するは三退を防ぐためと説かれている。華嚴宗の子璿は次の様に説かれている。

「防退中論衆生者十信初心之上品也、怯弱

等者謂於生死中創起覺悟惑業則無始積集

善行則方將修學境強心弱障重力微在於觀

心寧無恐劣娑婆者此云堪忍具足五濁実不

可居故經云。」「起信論筆削記才二〇卷」六十五頁

とあり

「聖意中論勝方便者即念仏三昧十六觀門及

仏願力等隨願下如隨願往生經所說十方皆有淨土若欲生者隨願往生。」(六十六頁)

とあり

「引經中論修多羅等者即阿彌陀無量壽瑞相

及觀經等如小彌陀經說從是西方十萬億仏

有世界名曰極樂樂事極故名爲。」(六十六頁)

と説かれている。

義記要沢普寂は「初中勝方便謂轉生淨刹令免退

隨之善功」と説いて、專意念仏とは汎く往業を論ずる

始は則ち事理万行廻して往生を得る。又專意念仏は能く

三根を摂し速やかに三昧を發すれば往生を得るとあり、

般舟三昧經には阿彌陀仏を專念する故に往生出来る。大

經には仏言く、「專念故得往生云云」とある。

この様に見て行くと、「專意念仏の因縁」によつて淨土

に往生し、常に仏を見奉つて親承供養し惡道を遠離せよ

と言うのである。その具体的な例とし示されたのが彌陀

の教、即ち専ら西方極樂世界の阿彌陀仏を念じ善根廻向

して願生すれば、彼の淨土に往生を得、一度往生すれば

常に見仏し從つて不退を保つことが出来る。又勝機あつ

て如来の法身を觀じて、常に勤修すれば又往生し正定に入ることが出来ると言う勝方便による不退を得る道を説いているのに注意すべきである。又易行品では、仏名を開信し称念することによる不退を説いているに對して、起信論では阿彌 仏を専念し善根を廻向することによる往生を明かしている。専念と言うのは、恐らく觀經に説くが如く觀念の念仏と思われる。次に法身觀を併説しているか無相觀であり理觀であるとすれば、今の専念は仏の相好を觀する有相觀であり事觀であらう。又注意すべきは、易行品は現身に於いて不退に入る道として聞名称名を説いているが起信論では不退を目標とすることは事実としても、その不退に至る前提として先ず仏國に往生することを求めている。即ち念仏によつて往生し、往生によつて見仏する。見仏によつて不退を得、而して徐々に薩への行を積むのが順序である。以上の如く見ると起信論念仏即ち、觀念口称の両通を以つて説いているところは、今日淨土教に於ける称名念仏の意味と恐らく共通するところであらう。

法然教学の思想史的研究

松 永 寿 秀

私はこのたび卒業論文を書くに當つて今年法然上人が往生されてから七百五十年に當り記念すべき年でもあるので、淨土宗開祖法然の教学について根本的に研究してみようと思つた。そこで法然教学といつても問題が非常に大きすぎるので特に「選択本願念仏の義」を中心として思想史的に考察してみた。

法然の開宗運動が平安中期以来の淨土教を繼承してあらわれたことは多くの學者によつて論ぜられているところであるが、専修念仏という点で、従来の淨土教と區別される。従来の念仏信仰はさまざまの功德を併せ修したのであるが、法然は唯念仏一行を専修して、余行をことごとく捨閉拋擯すべきことを主張して念仏の外に正因なしと断じたのである。

又従来の念仏には理觀の念仏とか、色想觀とか雑多な